議会レポート

発行者　鈴鹿市議会議員 石田秀三
鈴鹿市伊船町2751　電話 371-0423
2008.9.30　№１５９　FAX 371-2469

子ども医療費年齢拡大を

6500万円の余裕財源使えばできる

9月10日の市議会本会議一般質問で、私は乳幼児医療費の年齢引き上げを求めました。鈴鹿市は昨年の９月から、医療費無料化の助成対象を「４歳未満児」から「就学前」までに引き上げ、市民から喜ばれました。その後、三重県が同様の引き上げを決定、この９月からは県内すべての自治体が「就学前」になり、鈴鹿市の独自策ではなくなりました。

この制度は県と市が２分の１づつ負担する方式なので、昨年より市の持ち出しが半分にへることになります。私はこの「余裕財源」を、さらに年齢引き上げに使うことを提案したのです。

小学校卒業まで「入院」なら3000万円で足りる

担当部の答弁では、「就学前」までを市単独で負担していた費用が、およそ年１億3000万円でしたが、県の制度拡大により半分の6500万円が「余裕財源」になります。一方、小学校卒業までの無料化を市独自で行なうと、２億～２億５千万円の費用が必要になる、「入院」のみなら3000万円が必要、とのことでした。

私は、菰野町が行なったように「入院」のみ引き上げなら、すぐに出来ると指摘し、川岸市長にただちに実現するよう求めましたが、市長は「財政状況をみて検討したい」などと答えました。私は市長に「すでに昨年、独自で年齢引き上げをした時に、１億３千万円の負担を決断したのではないか。私はあらたに費用を出せと言っているのでなく、その余裕になった分を回せと言っている」とただしました。市長は「数字的にはそのとおり」と認め、具体的に制度の拡大の検討を行なうことを表明しました。せっかくの6500万円が、きちんと子どもの医療に使われるように今後も求めていきます。

公立幼稚園統廃合案、ここが問題だ

いま23ある公立幼稚園を12に（幼稚園６園、幼保一元化施設６ヶ所）再編しようという案について、私は一般質問の中でただしました。水井教育長との問答の中で、次のような点が問題だと感じました。

①いま定員割れで園児数が少なくなっている園は、５歳児しか受け入れていない。再編後の園では４歳児を受け入れるとしているが、それなら今の園に４歳児を入れて２年保育にすれば、廃園の必要はないではないか？

②いまの幼稚園は小学校に併設され、地域に根ざした特色がある。再編案では地域を「中学校区」と広くしているが、幼児教育と中学校区はどういう関係があるのか？廃園となった所は「小学校区」と縁が切れてしまうのに中学校区の別の園に行けば良い、という理屈はとおらない。

③公私立の保育所も私立の幼稚園も、中学校区を超えて市内中から幼児を集めているのに、公立幼稚園だけ中学校区で統廃合するというのも、まったくスジがとおらない。「統廃合ありき」に後から付けた理屈ではないか？

「幼稚園再編整備検討委員会」は、これからも毎月開かれて議論を進めていく予定です。その内容にしっかり注目しながら、市民の生の声を届けていくことが重要です。

中学校クラブ費、いまだに公費よりも多い父母負担

07年度決算の審議の中で、私は教育費での父母負担（学校で集金する費用）について聞きました。給食費とか修学旅行費などは除いて、本来公費でもつべき費用を、親から集金していないかという質問に対して、教育委員会の答えは次のようでした。

◎学級通信などのプリントの紙代を「学級費」などから出している金額は、小学校で287万円、中学校が232万円。公費の消耗品費が小学校2493万円、中学校1464万円であるが、これだけ不足しているということです。

◎中学校のクラブ活動費に、公費で出している分は1365万円、「クラブ費」として集金している分は1510万円。なんと！公費よりも集金している方が多く、生徒１人当たり年2700円ほどになります。各部の「部費」は、これとは別に集めているので、父母負担はさらに重いということです。

土地開発公社の財産、15億円以上の目減り、実際はもっと多額に

07年度決算に関連して、鈴鹿市土地開発公社が保有している土地について聞きました。公社の決算書を見ていると、公有地の「評価減」という項目があり、07年度には５億5000万円、05年度にも10億円が計上されています。これは何かと聞くと、土地の「簿価」（買ったときの価格＋経費）より「時価」（いま売れる価格）が50％以上下がったものを、訂正したとのことでした。バブル時代の高値の時に、目的もはっきりせずに買った土地のツケが、いま徐々に来ているのです。

さらに目減りすれば債務超過のおそれも？

問題は、時価との差が50％以内の土地がまだ多くあるのではないか、それらの差額の合計がどれほどになるのか、という点です。例えば伊船工業団地９ｈａの簿価は約23億円ですが、時価は14億円ほどです。（企業は入っているが借地契約になっていて、売れたときに「評価減」が起きる。）

公社の保有地の簿価合計は07年度末で111億円、一方、借入金残高は88億円もあります。もし保有地の「評価減」が23億円以上出てくると、資産より借金が多い債務超過という事態になります。

米は大豊作、サツマイモは猿の腹に

毎年１反の田で米を作っていますが、今年は記録に残る大豊作でした。例年は７俵とれれば良しというところを、今年はなんと９俵半もありました。夏の天気のせいで、どこでも豊作だとのことですが、中でもわが田はトップクラスです。経費を考えれば、買った方が安いほどの「高い米」なのですが、金に換えられない達成感があります。政府の農業切り捨てで、とても儲からないのに日本中で米を作り続けているのは、日本民族の意地なのでしょう。それにしても、輸入米の「事故米」で大儲けしているブローカーと、同じ穴のムジナの農林官僚には本当に頭にきます。

一方、畑に植えたサツマイモがそろそろ大きくなってきたかと思いきや、一夜のうちにサルに盗られてしまいました。こちらも被害金額にすれば大したことはなくとも、金に換えられないほどガックリきました。

ずいそう

「アンパンマン」の作者

「おそ松くん」や「天才バカボン」など子どもの時から親しんできたマンガの作者、赤塚不二夫が亡くなったというニュースを聞いて、ああまた我らの時代の象徴がひとつ消えていったのか、と寂しい気分になった。

そんな中で、89才にして現役、元気にがんばっているのが、「アンパンマン」の作者・漫画家のやなせたかしである。やなせ氏は「手のひらを太陽に」という歌の作詞者、「詩とメルヘン」誌の発行など、いろいろな仕事をしているが、本業のマンガでは代表作と言えるものがなかなか出なかった。やっと「アンパンマン」が絵本で、子どもたちに人気が出てきたのが80年前後、やなせ氏は60才過ぎというかなりの遅咲きである。その後70才ごろに「アンパンマン」はアニメ映画になり、いまや日本中の子どもたちのヒーローとなった。わが家でも子どもたちが小さい時から、今その子どもの孫まで長年お世話になっている。

自分を犠牲にしてでも人を助ける「正義の味方」

やなせ氏が絵本「アンパンマン」を出した当時は、困っている人に自分の顔を食べさせるというストーリーに、出版社や評論家、幼稚園の先生からもいっせいに反対の声が上がった。しかし、それがだんだん子どもたちの人気者になり、30年以上の超ロングセラーになっている。

やなせ氏はアンパンマンを描いた理由を、自分の戦争体験からこう語っている。軍隊に入り中国大陸に派遣され、「圧政から人々を救う正義のたたかいで」と信じていたが、敗戦で一転、悪人・罪人扱いされ、「正義」なんていい加減なものだと知った。

それよりも食べるものがないことが、つらく情けなかった。人間がもっとも苦しいのは、空腹と飢えだと体験した。飢えている時に、自分の身を犠牲にしてでも食べさせてくれる人が、一番ありがたい。悪人や怪獣をやっつけるだけの「正義の味方」はインチキくさい。アンパンマンはカッコ良くないが、人を助けたいと思ったら、自分の頭をかじらせてでも力になろうとする。それがやなせ氏の「正義」なのだという思いが、アンパンマンには込められているのである。（10月に教育テレビ「人生の歩き方」で4回放送の予定。）